

ISSN 2186 – 3989

近代日本社会における「世間」の諸相（その１）
－身分・地域・女性－

板倉 栄一郎

A verification about various aspects “SEKEN”
in Modern Japanese Society(part1)

－ Class Differences, Regional Difference, Gender Differences －

Eiichiro Itakura

北 陸 大 学 紀 要
第55号(2023年9月)抜刷

近代日本社会における「世間」の諸相（その 1） — 身分・地域・女性 —

板倉 栄一郎*

A verification about various aspects “SEKEN”
in Modern Japanese Society(part1)
— Class Differences, Regional Difference, Gender Differences —

Eiichiro Itakura*

Received August 24, 2023

Abstract

With regard to “SEKEN” in modern Japanese society, this paper takes up the theme of “pre-modern traditional communities that have continued to this day”, and draws on the knowledge of history and folklore, from the three viewpoints of class difference, regional difference, and gender difference.

In this context, this paper refers to class difference and regional difference.

As a result of verification, it became clear that “SEKEN” has changed due to changes in human consciousness caused by changes in the industrial structure and the movement of people.

Key Words : make a living, class difference, regional difference, history, folklore

<構成：2 部構成>

はじめに

第 1 章 「世間学」と身分について

第 1 節 研究史の概観—「世間」の復活か溶解か—

第 2 節 「世間」の身分差—それぞれの「世間」—

第 2 章 「世間学」と地域について

第 1 節 民俗学における「世間」—柳田國男が捉えた「世間」—

第 2 節 「世間学」と歴史学・民俗学—身分・地域・家—

* 北陸大学経済経営学部 Faculty of Economics and Management, Hokuriku University

小括 1－「世間学」と身分・地域－

(以上、その 1：第 55 号に掲載)

第 3 章 「世間学」と女性について

第 1 節 民俗学における女性－上位層と下位層－

第 2 節 中間層という存在－旧中間層と新中間層－

第 4 章 「世間学」とスマホ社会について

第 1 節 「世間」とスマホ社会－個別化と承認欲求－

第 2 節 一面性社会の到来－建前と本音－

小括 2－「世間学」と女性・スマホ社会－

おわりに

(以上、その 2：第 56 号に掲載予定)

はじめに

本稿は、日本の近代社会における「世間」について、「世間学」の 4 つの骨子の一つである「“前近代的”な伝統的共同体が明治時代以降、今日に至るまで続いているのではないか」を取り上げ、これを歴史学や民俗学の知見を参考に階級差、地域差、性差の 3 つの視点から検証し、併せて現代社会における「世間」及び「世間学」についても私見を提示することを目的とするものである。

明治維新の後、日清戦争を機に産業構造の比重が第一次産業から第二次産業へと変化し始めたことや大都市へ人口が移動したこと、学歴社会の登場や商品経済の発達による消費社会の進展、そして女性の社会進出など、日本の近代の歴史には日本社会に変化をもたらした要素が幾つかある。そして、これらの変化は当時の日本人の生存や生活（本稿では、適時、“生きていくため”と表す）に対する意識と密接に関わってくる。従って、「世間」が前近代的な伝統的共同体が現代に至るまで続いているのではないかという問いに対しては、これを様々な角度から検証する必要がある。とりわけ、前近代的な伝統的共同体という語句に着目すると、江戸時代には身分制が確立されていたことから明治維新以降も各々の身分に応じた「世間」が残存していたということになり、このことから各々の身分に応じた「世間」を検証する必要があると考える。従来の「世間学」研究は、身分差に焦点を当てた研究がされてきたとは言い難く¹、また「世間学」の 4 つの骨子の中には、主に上位層の「世間」の一端を明らかにしたものに過ぎず、下位層には当てはまらないのではないかと考えられるものもある。従って、当時の日本国民の大部分を占める平民の「世間」を明らかにする必要がある、そしてその手段として歴史学や民俗学が「世間」をどのように捉えていたかを今一度、検証する必要がある。特に民俗学における「世間」については、「世間学」の視座とは異なった解釈がされている場合があり、民俗学が日常の生活や文化を再構成しようとする学問領域であることから、これを検証することで従来の「世間学」とは異なった見解を導き出せる可能性がある。

次に、「世間学」が示した「世間のルール」－「贈与・互酬の関係」、「身分制」、「共通の時間意識」、「呪術性」－に関しては、そこに住む人間集団が“生きていくため”に集団内に課したルールであり、自然環境や風土、慣習などの影響によって地域独自の「世間のルール」が存在することが容易に想像できる。そして、このことからすると、「世間のルール」を日本社会に共通のものとして統一的に当てはめることに対しては慎重にならざるを得ない。特に各地域における生活文化の違いに焦点を当てることは、平民の「世間」を知る上でも重要な作業であり、具体的に検証することで本稿の問いに答えることができるの

ではないだろうか考える。

更に、“生きていくため”という観点に立つと、日本の近代社会における女性の存在が浮かび上がってくる。度重なる戦争や出稼ぎ等によって男性が“不在”になる時期があり、その間に実質的に家庭を切り盛りしたのは、女性である。「世間」という共同体の中で生活していくために女性は、働くことは言うに及ばず、近所付き合いや共同体の祭事等、「世間」と深く関わらなければならなかった。要するに、男性よりも女性が「世間」と関わり合う機会が多いことから女性の視点に立った「世間」を考察する必要があると考える。加えて、一般的に取り上げられる良妻賢母型の女性は、少なくとも戦前までは上位層の理想像であって下位層には程遠いものであったとも容易に推測できる。このように、「世間」と女性—平民の女性—についても考察をすることで、「世間学」についての新しい知見が得られると考えている。

第1章 「世間学」と身分について

第1節 研究史の概観—「世間」の復活か溶解か—

「世間学」については、「世間学」の嚆矢である歴史学者の故阿部謹也、そして阿部の主張を正統に受け継いだ刑法学者の佐藤直樹の一連の著書が研究史上、重要な位置を占める。最初に佐藤が示した「世間学」の4つの骨子を確認しておきたい（佐藤 2023）。

- I. 「世間学」の基本テーゼである、「贈与・互酬の関係」・「身分制」・「共通の時間意識」・「呪術性」の4つの「世間のルール」が存在する。
- II. 日本社会には西欧で意味する「社会」や「個人」が存在せず、「世間」が存在する。
- III. 日本社会は、法律よりも「世間のルール」を重視する。
- IV. 「世間」という伝統的共同体が、現代に至るまで続いている。

本節では、「世間学」研究の概観を辿りつつ、その問題点を指摘したい。

阿部は、晩年の著書で明治以降の近代化の結果、「他方で伝統的な人間関係、特に親子関係や人間関係一般は欧米化し得ませんでしたから、伝統的な形で生き残ったのです。近代化が文字と数字と論理で進められたとするならば、伝統的な文化は言葉と振る舞い、義理人情の世界として生き残った」と、日本社会が二重構造になったと論じる（阿部 2006：138）。そして阿部の見解を受け継いだ佐藤は、近著で社会学者の A. ギデンスが提唱した「脱埋め込み」を援用し、「たしかに近代化＝西欧化によって「世間」は部分的には解体されてきた。にもかかわらず、日本においては共同体からの解放という「脱埋め込み」が不徹底で、人々が「世間」という伝統的共同体に縛られるという＜前近代＞的な状況は、明治時代以降、今日にいたるまで続いているのではないか。」と論じている（佐藤 2023：100）。更に佐藤は、家族社会学者の山田昌弘の「希望格差社会」という見解を引き合いに 1998 年を歴史の分岐点であったと位置づけ、世界的なグローバル化とそれに伴う自己責任を前提とした新自由主義の台頭を背景に「世間」が復活・肥大化したと論じている（佐藤 2023：138）。

「世間」が復活したのではないかという佐藤の見解に対して、社会学者の今枝法之は、「世間」が溶解したのではないかという立場をとる。今枝は、阿部の「世間学」が社会心理学者の井上忠司の学説を踏まえていないことを指摘した（今枝 2014a）上で持論を展開する。そして地縁・血縁・社縁的な外的共同体と個人との関係性が希薄化ないし消失し

つつあることを明らかにし、伝統的な「世間」が脱伝統化・個人化・情縁化したとして、それを「世間」の現代化と位置付けた（今枝 2014b）。

このように、「世間」を現代という立ち位置で捉えた場合、これを復活・肥大化と見る立場と溶解と見る立場の二通りの見解に分かれる。しかしながら、両者の見解はいずれも現代から遡及的に捉えた上での見解であり、特に明治から昭和前期までの日本社会の実態に踏み込んだ上での見解ではない。従って歴史学や民俗学に依拠しつつ、近代日本社会の変化と生活実態の変化を丹念に辿りながら検証する必要がある。

第2節 「世間」の身分差－それぞれの「世間」－

本節では、骨子Ⅰにある「身分制」という観点から検証を進める。前節で研究史上、阿部・佐藤が「世間」の継続ないし復活という立場、今枝が「世間」の溶解という立場に立つことを確認したが、いずれも身分差という観点から検証されたわけではない。この点について、例えば 1872（明治 5）年に作成された明治政府による最初の全国的な戸籍である壬申戸籍によると、全人口の実に 93%以上が穢多・非人を含めた平民であり、また何冊かの高等学校・日本史資料を確認しても 92%程度と記されているので、平民身分の割合は概ね 92%を下るものではないと推察できる。そして、平民は、農民・工人・商人・雑業・雇人等に区別され、更に山や海での生活を生業とする人々など、環境や慣習に密着した平民の生活集団があり、当然、そこには各々の「世間」がある。

身分制については、阿部が島崎藤村の『破戒』を題材に被差別部落に対する差別に言及し（阿部 2006：104）、「世間」には差別的な構造があり、その影響が現代においても被差別部落の問題を未解決のままにさせているのではないかと論じている（阿部 2003:56）。そして、このことを「世間学」の身分制の根拠として位置づけた上で「世間」が現代社会に至るまで継続した理由の一つとしている。被差別部落と「世間」との関わりについては、被差別部落に対する偏見が存在したことが後述⑥にも窺えるので、阿部の見解を否定はしない。しかしながら、例えば 1935（昭和 10）年の調査では、全国における被差別部落の地区数は 5361、総人口比約 1.44%であり²、総人口に占める割合が極めて低い。このことから、阿部が論じた被差別部落との関わりで論じた身分制の見解を「世間学」の一般的見解の一つとすることに対しては、慎重にならなければならない。その一方で、平民は上位層や下位層に区別され、下位層の中には上位層に新たに移動する場合もあるが、その数は決して多くはないと推察できる。従って、下位層の「世間」に焦点を当てて検証をすることで「世間」に対する新しい知見が得られる可能性があると考え。そこで、改めて上位層と下位層の「世間」を確認しておきたい。

（1）上位層の「世間」－広津柳浪の『世間』と大正末期の心中未遂事件－

この作品は、1907（明治 40）年に小説家の広津柳浪が著した³ものであり、義理・恩・世間の評判（世間体）・名誉・家柄など、「世間」に関する内容が盛り込まれている。阿部は、この作品を「いわゆる「世間」の描写になっている」と解説している（阿部 2004：92）。その内容は、主人公に想いを寄せられる男性が、主人公の母（継母）の過去（重婚）を仕組み、それをネタに嫌がらせをする男に対して、世話になっている主人公の両親に対する義理を果たそうとすべく、男のもとへ向かうという小説である。主人公の父は銀行の頭取であり社会的地位が高いこと、継母の生まれは裕福であったが、男に騙されて全財産を失った経緯があること、全体を通して登場人物が上品な言葉遣いを用いていることなどから、上位層の「世間」を描写していると判断できる。

次に紹介したいのは、大正末期に実際に起きた心中未遂事件である。この事件については佐藤も取り上げている⁴ので、それを参考に要点のみを記すことにしたい。K 男爵の長男が、1925 年 6 月に赤坂の芸者と中禅寺湖で投身自殺遂げようとしたが、相手は死亡し自分だけが生き残った。長男は、東京大学を卒業し某商社に就職したのち実業家の娘と結婚して二人の間には男の子がいたという。そして、父親の K 男爵は爵位を返上し、貴族院議員や日本医師会会長などの公職を辞したというスキャンダラスな事件であった。この事件に関しても、父親が公職に就いていることや息子も大学を卒業ののち、実業家の娘と結婚したということからすると、上位層の「世間」であると判断することができる。

(2) 下位層の「世間」－横山源之助著『日本の下層社会』（横山 2004）より－

1899（明治 32）年に、ジャーナリストの横山源之助が著した下層社会のルポルタージュである。横山は、東京市の状態について、「多数は生活に如意ならざる下層の階級に属す。」とし、そして最下層に位置づけられる細民については本所・深川の両区を挙げ、「けだし本所・深川の両区は、他の十三（筆者曰く：東京市 15 区の中の 13 区）に比して旧幕の時代より自ら風習を異にし、封建時代の特色たる武士の住居せること少なく、純然町人より成り、特に商人の類にあらずして職人および人足・日傭取の一般労働者より成り立ち、地形の上に隅田川を以て区画すると等しく、人情風情も一般と異なるものありたり。」と記す（横山 2004：23）。このことから、同じ東京市に属する中でも職業によって区毎に分かれていることや風習が異なるという表現から、各地域の「世間」があることを窺わせる。

また、横山は、様々な職種を取り上げて労働や生活の実態を、東京や大阪といった都市だけでなく地方にも目を配りながら詳細に書き残している。因みに、本著には、政治家の日野資秀が序文を寄せ、「社会問題とは何ぞや。即ち下層人民問題なり。この下層人民は国民の最大多数にして、しかも一国生産の主動力たり。」（横山 2004：7）とあることから、国民の大多数を占めているのが下位層であることを傍証する。以下、下位層の実態を職業別に見ていきたい。

① 日稼人足（33-39 頁）

日稼人足について、これを 6 種類に分けた上で、「おのおの事情を異にし、生活に大差あり」と記す。この中で、「隨時道路の修繕等に出づる日稼人足」を甲とし、「もっぱら土木工事に従う日稼人足」を乙としているが、この 2 種類が「東京市中日々数万千の日稼人足使役せらる」とあるように多数を占めたことが判る。注目すべきは、甲と乙の違いである。甲については「親方との関係は極めて薄し」「親方に対しては何らの徳義なく人情なし」と記されているのに対して、乙については、「一般日稼人足とは大いに趣を異にし、社会を別にす。」とし、「土方は必ず親方あり兄貴あり、これに入るには幾久しき習慣より成りおる一定の方式によらざるべからず」と、旧来の慣習を重んじている。

このように、同じ職種でも違いがあり、乙を他の日稼人足と社会が異なると記していることからすると、日稼人足の社会の中にも時代の流れに応じた新しい変化が起きたと判断できる。阿部は、「世間」が現在もなお機能する理由の一つに義理人情を挙げているが（阿部 2006：104）、乙に見られるように、旧来の慣習を重んじることが特殊であるという時代の変化が確認できるのである。

② 職人社会（81-105 頁）

職人社会を記すに当たって、横山は、「即ち、旧幕時代階級の一ツなる士農工商の中の工にして、厳然社会の一方に樹立しその気質・傾向・気風を他の士や農や

商人の者流と異にせり、いわゆる職人氣質なるものこれなり。しかるに時勢の変遷と共に、あらゆる階級の変化につれて同じく職人社会も頽浪の中に捲き込まれ、今や旧時の面目を失わんとす。」と記す。そして、職人社会を居職人と出職人の 2 種類に分ける。

出職人については、これを労力を売って生活をする純然たる労働者とし、居職人については、「地方に至れば一面は労働者の階級に属して、しかして多方面においては自ら資本を下して店を開きその製作品を売れるは多く、ある意味にては商人たるが如く見ゆる場合あり。」と記す。また、気質についても、出職員は「宵越しの金は持たない」兄貴肌であるのに対して、居職人は風采を華奢にしてむしろ商人に近づける傾向にある、と特徴づけている。ここに、職人社会の気質の変化や職人社会の変化（商人化）という時代の変化が読み取れる。

③ 問屋と職人 (86-97 頁)

横山は、問屋について、「維新前は産業界にては唯一の主権者にして実に平民社会には上級を占めたり。」、とし、居職人の中には問屋になる者もいると記す。そして、「問屋は無限の権力を有し、荷主・仲買・小売商を臀下に敷き、威張りに威張りて時にあるいはこれらの者と同席することすら否みたり。」、「工業社会にも威を振えり。」「問屋なる一種の資産家は商業工業の上に勢力を占め、隠然平民社会の主権を握り居れり。」と記す。しかしながら、この状態も明治維新を機に変化した。すなわち、維新前は「株」という営業認可があり、その数が限定されていたが、維新後は、その特権が廃止され問屋の数が増加する。そして、このような状況の中で居職人が問屋化、すなわち商人化したのである。

一方で、出職人には、得意場があり、出入先と呼ばれる者が存在した。出職人と出入先との関係は、一種の主従関係を結んでいたらしく、年末年始には干鮭や鰯節などを送って出入先の機嫌を損なわないことを習慣としていた。しかしながら、「今日、出入先の関係、主従的習慣は漸次消滅して請負に性質を変じ、雇主は特に出入職人なりとして一人の職人に定むることをせざるのみならず、職人もまた出入先なりとして尊重を置かざるに至れり。」と横山は記す。そして、請負については、それを一種の事業と見なし、「ために職人間に存する秩序階級は破壊せられたる」と記すのである。更に、棟梁と配下の職人の関係も「一時的にして昔日の親方・子分の関係消滅し、ただ金銭的關係を存するのみ。」「義理人情にかかわることなく残れる義務年月を胡魔化して去るは多し。」と記す。ここに、前近代的な人間関係が資本主義の台頭によって破壊されていくという時代の変化を読み取ることができる。

④ 手工業の現状 (114-149 頁)

横山は、桐生・足利地方の織物工場の現状について、工女の数について、「桐生・足利地方の者甚だ少なくして、あたかも大阪府下の紡績職工が他地方の者多きが如く、特産品なき地方即ち越後・越中・能登・加賀より来れるは最も多く、その他越前・武蔵・相模・上総・下総・甲斐地方の者多し。」とし、その数は年々多くなってきていると記す。続いて、「けだし桐生・足利地方にては、少しく資産ある児女を外に出して工女となすを快しとせず、家に置きて賃機に従事せしむ。」と記し、一方で、地方から来た工女は一家の犠牲となれる者としているが、ここに生活格差や労働者としての工女の移動の実態が読み取れる。

横山はまた、福井市の手工業の現状について、「他国から来る工女は少なく、概ねその地方の者であり、その多くは家から通うものである」、と記している。そして桐生・足利のような賃業者を見ることが少ないことも指摘している。ここでは、

女性の労働における地方の差異が窺える。

⑤ 燐寸工場 (150-165 頁)

燐寸工場については、「世間」との関連で指摘すべきところはほとんどない。しかしながら、生糸・茶・織物・米につぐ外国輸出額を誇る燐寸工場は、「児童の労働を見るに最も格好の材料を得るものがあるが如し。」とあるように、児童が労働者として記されており、下位層の労働力が児童にまで及んだことを表している。

横山は、阪神地方の燐寸工場について記す中で神戸と大阪の燐寸工場の実態を比較し、「神戸は支那地方を得意として安全燐寸を製造する者多しといえども、大阪にては印度地方に向く黄燐燐寸を製する者多く、これに伴うて神戸にては支那商館と関係する者多く、堂々たる燐寸大工業家にして支那人の鼻息を窺い、かの不当なる五厘金廃止についても大阪はこれを廃するに一致するといえども、神戸はかえって支那人に味方す。」「神戸は一己人工場なるは多しといえども、大阪はその大なるは会社組織なるは多し。」と記し、印度と支那との関係の違いが神戸と大阪にあったことを示している。因みに、年々、機械が労働の範囲を侵略しつつあることも、横山は指摘している。

⑥ 綿糸紡績工場 (185-231 頁)

この当時の日本の最も注目すべき産業が、綿糸紡績工場である。横山は、大阪地方の紡績工場について具に記す。最初に注目されるのが工女の多さで、「男工に比せば女工は二倍ないし三倍に近き多数なれば」とし、15 歳以上 20 歳以下の工女が最も多かったと記している。ここに、下位層の女性の労働者としての一面が表れている。そして、紡績工場の欠勤者が多いことに驚き、その多くは懶惰に基づく」と記している。工場内には教育が施されている所もあり、学校が設けられて読書・作文・算術・習字・修身などが教えられたという。貯金についても横山は記している。「けだし義務貯金は一方より言えば、職工の勤勉を図り将来を保護するより出でたるものなるべしといえども、またこれを工場者の都合より見れば職工の逃亡もしくは転業を防ぐの一方法として名を貯金に託し、強いて職工の移動を防がんとせるが如き事情もこれあり。」と、工女が労働力として貴重であったことが判る。因みに、大阪府下の紡績工場には、いずれの工場にも地方から来た者が多く、これは東京の工場も同じであると記している。

最後に、以下の文章を挙げておきたい。「天満紡績会社にては、石川県より新平民の児女を募集し帰り、ために他の職工は「新平民の児」と共に操業するを喜ばずして同盟罷工を企て大いに紛擾を起せることあり。もしそれ募集に窮せば乞食にても何にても手当たり次第伴いゆくことまま稀ならざるなりけり。」と。新平民とは被差別部落民のことを指すが、会社内でも被差別部落に対する偏見が存在したことや労働者の供給に窮していたことを示している。

⑦ 鉄工場 (234-251 頁)

男工は鉄工場に最も多いと横山は記す。「鉱山もしくは鉄工場の如き、殆ど婦女子の用なかるべく覚ゆる工場においてもなお婦女労働者見ること多く」「しかして我においては砲兵工廠に入り込める婦女労働者の如き、大抵その職工の妻子なり。紡績・織物等の労働に服する婦女子の如きは、生活事情を除き他に理由の存するものあるべしといえども、鉄工場等にある婦女労働者の如き、特に鉄工の妻子にして工場に入るは、悉く止むを得ざる生活の必要によるのみ。」と。本来は、男工が多いとされる鉄工場であるが、中には生活の必要から鉄工場に従事する女性や共働きの夫婦も存在した。これが下位層の生活実態である。

また、「かつ同じく鉄工といえども、関東と関西はその気風において、或る人は

東京の職工は義理堅しといえるを聞きたれども、とにかくも大なる相違なきが如しといえども、なお種々の方面について多少の相違あり。」と関東と関西の気風の違いについて記している。尚、関西と関東の気風の違いについては、第 2 章でも再び取り上げる。

⑧ 見習職工 (272-275 頁)

産業構造の変化によって見習職工の性格が変化したことが判る記述がある。「これを聞く、曩日は大工の如き左官の如き、もしくは木挽・挽物職人等、おおむね七年ないし十年の年月を親方の許に年期奉公し、修養したる上に、ワタリと称して諸国を遊歴し、技倆を鍛うるを普通とし、即ち職人は一の労働者に過ぎずといえども、常に自己の品位を重んじ、たとい膳を列べて食事する場合にも、互いに相下ることをせずにおのおの見識を保ち、深く骨頂を存せり。故に馬鹿らしきほど職人の顔（体面）を重んじたる割合に、その腕（技倆）鍛うことをこれ力め、これをもって職人の精神とし、本領とし、神聖なる者とはなせるなり。」と。

しかしながら、時代の流れによってこの傾向も廃頽したと記す。そして、「曩日に比ぶればその製作品は粗雑に流れ、一に多量に産出することのみ競うに至れり」と、その現状を記すのである。言うまでもなく、それは時代の変化であり、旧来の伝統的精神が産業構造の変化や消費社会の登場によって崩れていくことを雄弁に物語っている。

以上、伝統や文化、習慣が時代の流れとともに変化してきたことを地方の現状を踏まえて確認してきた。職業ごとにそれぞれの「世間」があり、単なる労働の在り方だけでなく、「世間学」の根拠となった義理人情が時代の変化と共に廃れていったことが判る。

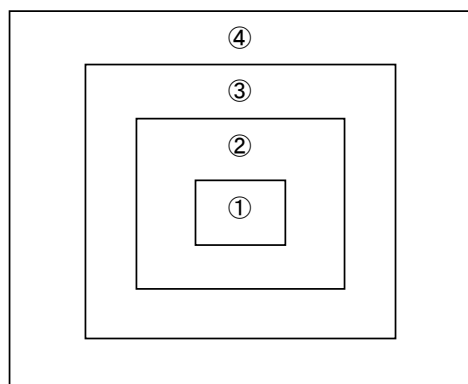
最後に、横山は、「田舎の風尚」と題して、自身の出生地である富山県の変化についての文章を載せている（280-283）ので挙げておきたい。「ちよいと路上を往来候ても、十年前は盆か正月婚礼の場合などにあらざれば殆ど見ることなかりし五ツ紋の黒羽織を、あの男がと思うものまでペラペラ着て歩くを見受けられ、頭には山高帽、これに擬髻を鼻下に置かば立派な紳士と見られ候ぞかし。」「婦女の粧飾につきて相見候も、以前は芸妓もしくは娼妓のほかせぬものと戒められ、もし粉を顔に装う者あらば、「女郎のような女」と指斥せらるるものなりしに、当時は物日にはきつと化粧化し、髪も自己の手にて結ばず、おおむねかみゆいに結わせたり候。下女炊婦に至るまで。」と男女の服装の変化に言及している。社交についても、「相談あれば倶楽部に集まり料理店に会し、以前の如く自己の家に多人数を招きて酒宴を開くような面倒をなさず、極めて簡略に、極めて手輕に事をまとめおり候義、さては田舎も進歩せるものと思われ申し候。」と田舎の変化を記す。

更に、農民や漁民についても、「年々旧農家減少し、小作人増殖の傾向も相見え、しかして十年前に比べ見候えば、町の資本家の手に土地の落ちたるもの頗る多し。」「漁民はいかに。職人の近状はいかに。職人間の団結更になくなり候て、互いに得意を取らんとあせり、あるいは親分と子分と争うものあり。甚だしきは親子の間に得意を相争う如きものあり。漁民に至りては、十年前も今日もその生活の上に何らの変わるることあるなく、朦々としてその日その日を辛うじて暮らしおるに過ぎず候。」と職人間の団結が衰退したことを記す。因みに、本著の中で「世間」という用語が 3 例、確認できるが、そのいずれもが「世の中」（一般的な社会）という意味で用いられている。そして、このことは次章で取り上げる民俗学における「世間」にも言えることであり、次章では、この点を踏まえて「世間」と「世間学」について論じたい。

第2章 「世間学」と地域について

第1節 民俗学における「世間」－柳田國男が捉えた「世間」－

民俗学者の柳田國男は「世間」について、「田舎は都市を世間と考えた」（柳田 2017:125）と記している。また、これ以外にも前章で取り上げた『日本の下層社会』と同じ、「世の中」の意味で用いている事例が確認できる⁶。処で、「世間」を構造という観点から分析した社会心理学者の井上忠司は、社会学心理学で用いられる「準拠集団」という概念を用いて「世間体の構造」について説明している（井上 2007）。



「準拠集団」としての「世間」の構造図
（井上忠司『世間体の構造』を参照）

井上は、心理学者の土居健郎の甘えの理論にあるウチとソトの区別を参考に、「世間」を構造化した。基本的には、「ウチー中間（世間）ーソト」の三層構造であり、一番内側を①「ミウチ、ナカマウチ」、次を②「せまいセケン」と③「ひろいセケン」とし、一番外側を④「タニン、ヨソノヒト」とした。そして、「せまいセケン」と「ひろいセケン」について、土居は「義理」の世界としたが、井上はこの2つの中間帯こそが「セケン＝世間」であるとした。佐藤も、ウチとソト（ヨソ）を区別し、それを前提にして持論を展開する（佐藤 2023: 66）。本節では、「世間」のウチとソトの関係及び

その変化について論じることから始めたい⁷。

井上のウチとソトの説明は、柳田が示した「世間」とは合致しない。柳田にとっては④の「タニン、ソトノヒト」も（こそが）「世間」である。この点に関して、柳田が記述の対象とした時代は主に明治・大正期、井上が対象とした時代は主に戦後のことであり、ここに時代の差異がある。ここで、やや唐突であるがテレビという補助線を引きたい。

脳機能学者の苦米地英人によると、聴覚、嗅覚、触覚、味覚から得られる情報にくらべて、圧倒的な量を誇るのが視覚による情報であるという。そして、生命を同一の状態に維持するために自動的に体が反応するホメオスタシス（恒常的維持機能）を紹介するのだが、このホメオスタシスは、脳の進化により外部の環境に対応するだけでなく、意識の内部変化にも対応することになっていると述べ、それを「洗脳」という言葉で表現する⁸。高度経済成長期以降、戦後の消費社会を迎えるに当たって日本国民が望んだものの一つがテレビであり、戦後、「テレビが家にやってくる」と表現されたように家庭生活に家族の一員のように好意的に迎えられた。そして、良きにつけ悪きにつけ、国民のほとんどがテレビが発信する様々な情報に影響を受けた。時代が進むにつれてテレビは、世界の裏側で起きている様々な出来事を瞬時に発信するほど高度化したが、その臨場感「タニン、ヨソノヒト」との境界線を曖昧にするほどの影響力を持つ。

井上は「あとがき」（井上 2007: 267）で、「交通・通信（最近では IT 関連の）技術や、マス・メディアの驚異的な発達によって、「セケン」はいちじるしく拡大した」と述べているが、しかしながら、柳田の「世間」の捉え方からすると、それは拡大されたものではなく、最初から存在していたものである。そして、前節で確認した平民の義理人情の衰退

を勘案すると、井上が言う「せまいセケン」と「ひろいセケン」は理論上、時代と共に衰退に向かうことになり、結果として「タニン、ヨソノヒト」の領域が2つの「セケン」に浸食され、「ミウチ、ナカマウチ」の外側に「タニン、ヨソノヒト」が存在するという二層構造になると考えられるが、しかしながら、そうではない。テレビというメディアを通して「タニン、ヨソノヒト」が「セケン」と同じ意識で繋がるのであり、その意味では「ひろいセケン」になると考えられる。そして、このことはホメオスタシスが持つ内部変化にも対応するという、先の苦米地の指摘でも確認することができる。戦後の日本国民の生活がある程度の豊かさを持ち、中流意識を持つに至った時代において、その中流意識を維持ないし向上させるという意識を持ち始めるわけであるが、その媒介としてテレビというメディアから影響を受けた日本人は、結果として画一性や均質性という言葉で一括りにされるようになった。すなわち、井上の言う義理人情を伴う「世間」が衰退していく中でテレビ時代が到来し、画一的・均質的な臨場感を日本国民が持ち始めたことで柳田や横山が示した「世間（世の中）」に同化した。そして社会に対する、「タニン、ヨソノヒト」という意識の領域は徐々に薄れ、戦前の「世間」とは異なる「ひろいセケン」（筆者曰く：大世間）が到来したのである。加えて、画一性や均質性を招いた「世間体」ー明治から昭和初期とは異なる「世間体」ーをより意識させることにも繋がったと捉えている⁹。

翻って、テレビが「一家に一台」から「一人に一台」の時代になり、相前後して IT 社会が到来する。IT 社会では「個別化」がキーワードになる。IT 社会と「世間」との関係については、第4章で考察するが、ネット等で「タニン、ヨソノヒト」同士が簡単に関わり合うようになるという実態を聞くにつけ、最早、「タニン、ヨソノヒト」という意識の領域は存在しないと感じざるを得ない¹⁰。現代の日本社会は「大世間」化したのである。

それでは、次に、これらのことを踏まえて柳田が示した「世間」について、ウチの変化とソトの位置づけという視点から「世間体」の変化に関する自説を補強したい。先に確認したように、柳田の記述を井上が示した構造図に当てはめると、「タニン、ヨソノヒト」も「世間」の範疇に入る。明治・大正期は、交通・通信は十分に発達してはならず、メディアも新聞や雑誌などの活字文化が主流であった。大正末期にラジオが登場し、当時の日本国民に影響を及ぼしたが、聴覚の文化であるラジオが活字文化と同様に人々にソトの世間を意識させたことは想像できる。そのような時代の中で人々は「世間」ーソトの世間ーに関心を抱いていたことが柳田の著書には窺える。

ウチについては、家の改築における以下の記述がある。「家の構造だけには今までもわれわれの予想以上に、前代生活の拘束があった。衣服や食物などは自分の気に入らぬとなると、すぐ変えてしまう便宜もあるけれども、家ばかりはそう容易に選択を左右することができなかった。少なくとも家が昔からあれば、気に入らぬ勝手のまま住んでいる。または自分で建てた家でも、辛抱をしなければならぬ点が発見されたとして、世間態（体）というものには不知不識の間に導かれている。その拘束の種類が昔も今も多かった。それにわれわれは快く附いて行くだけのいろいろの調手段を知っていたのである。大正十二年の震災は、関東地方の都市と農村において、古い新しいいろいろの家を破壊して、それからまる旧来の行きがかりを一掃してくれた。」（柳田 1976 上 97-98）。やや長い引用だが、要するに、関東大震災を機に旧来の行きがかりや世間体に変化したのである。

また、田舎から都市に移ってきた者について、「住民には故郷の因縁ばかりなお深く、人を他人と見、その親愛の地を互いに無視し合う風は、近く出てきた地方人ほど盛んであった。」（柳田 1976 上 189）と記す。加えて、「野暮とか無細工とかいう語を気にする者は、かえって農民の中に多くなった。かつて趣味豊かだといわれた地方にも、都会からは田舎向きという品が入って来る。それが地方人の憤怒と反抗とをかうために、かえって都市化の奨励を容易にすることになったのである」（柳田 1976 下 179）という記述もある。

このように、柳田の記述は、社会の変化に地方や農村、都市が反応し、それは物質的なものだけではなく、人々の意識も変わっていったことを示している。

更には、こういった意識の変化は、都市化や都市と地方、農村との関係性だけで測れるものではない。柳田は 1889（明治 22）年の「明治の大合併」にも言及している。これは、当初、7 万 1 千余りであった町村を一気に 1 万 5 千余りの市町村にしたという大規模な行政改革であり、それだけに新村と旧村（大字）の対立などの反動が各地で起こった。「上とか下とか東とか西とかあっても、実際はたいてい成立の時と事情を別にしている。つまり飛び飛びにあった旧い村々への間隙へ、後から追い迫いにはめ込んでいったのである。それゆえに隣村は互いに肌合いが違い、また若干の反撥心があった。それを地域によって一団体としたのだから、兵隊のようにいかなかったのも無理はない。」（柳田 1976 上：171）、と柳田は記す。この合併によって生まれた新しい村と大字との対立については、歴史学者の松沢裕作の見解が示唆的である。

松沢は、合併によって生まれた新しい村（研究上、行政村という）が安定するためには、大字を排除するのではなく大字をその下部機構に取りこむことが必要であったが、その前提として町村合併に同心円的な性格を持つ新しい秩序が生まれたとする¹¹。この同心円的秩序というのは、地理的範囲の大小に応じて重層的に所属するといった性格のものであり、例えば、一人の個人は、日本国民であり、市町村の住民であり、大字の住民である、といった意味である。前章で、下位層の意識が時代と共に変化してきた事例を確認してきたが、その変化に共通しているのは、「生きていくため」の経済活動であった。日清戦争以後の日本社会に資本主義というシステムが本格的に到来し、「個々の個別利害の追求者がネットワーク状に結び付く市場経済によって人びとの生活が支えられるような社会において、大字もまた、個別利害の追求者たちを便宜的に束ね、その共通の利害を処理する単位に変化していくのである。」と記した松沢によると¹²、そこにはかつてのような「地縁的・職業的身分共同体」は、最早、存在しないことになる。

逆に、山深い村や離島などでは、松沢が指摘した状況からは程遠かった。「世間体」について、雑誌編集者の大牟羅良は、岩手県の山奥の部落で聞き取った、「部落がせまいし、それに通婚範囲もせいぜい村内に限られるので、村の人々は殆ど家の家族構成から人柄、財産制度、血縁関係、若い男女の学校時代の学業成績までわかっている。」という狭い「世間」の中では、「（狭い）世間はどう思うだろうか」が常に判断基準になっていると記す¹³。これは、大牟羅が戦後、4 年にも及ぶ行商の途次に聞き取った言葉である。一方で、民俗学者の宮本常一の著書には、「世間のつきあい、あるいは世間態というようなものもあったが、はたで見ていてどうも人の邪魔をしないということが一番大事なことである。」という一文がある（宮本 2005：209）が、大牟羅の記述と一脈通じるものがある。すなわち、戦前の「狭い世間」では「世間の目」が基準であるが故に個々の思いが抑圧され、それは結局、「人の邪魔にならぬように」という考え方に落ち着いてしまうことになるのであり、この点が後述する戦後の「世間体」とは異なる。

次に、改めて、ソトを柳田はどのように捉えていたのかについて見てみたい。柳田の一文に次のようなものがある。「田舎の世間通は簾などの中から、外を覗いているような姿がある。」（柳田 1976 上：182）この点について、柳田は、田舎の人々は、「人込場を端的に世間と名づけつつ、自ら進んで其知識を獲ようとしたので、必ずしも一方の繁華が彼等を誘惑したのではなかった。」（柳田 2017：125-126）と記しており、新しい事物や知識を獲得しようという願いが閉鎖された村に住む人々の欲求であるとした。このことは、自ら進んで都市の文化を吸収しようと旅に出て、帰郷後に「世間話」として村人に旅での出来事を語るという習慣にも表れている。逆に、村を訪れた大工や左官といった渡り職人や薬売り等を「世間師」としてもてなし、いろいろな話を聞いて村の発展の一助としよう

としたという積極的な姿勢も窺える。

このように、ソトの世間とは村の発展や生活の改善には欠かせないものであって、ウチの「世間」がソトの「世間」を排除したという考え方は一面的である。関連して、井上の「世間」の構造化は、「世間」という“場”ではなく「世間体」という人々の内面にある“体面”を対象としたものである。その内面は、村の人々が生活改善のためにソトに目を向けるという心情がある一方で、先にも記したように生活がある程度、豊かになると、それを維持ないし向上させようという心情が沸くことも又、事実である。この二つの心情は、柳田が表現した「田舎の世間通は簾などの中から外を覗いて居るような姿がある。」と柳田が表現した「のぞき文化」¹⁴に端的に表れている。先に確認した、家の改築に伴う「世間体」は、あくまで＜前近代的な＞伝統的共同体の中でのものであって、それは“生きていくため”には避けられないものであった。一方で、戦後、日本社会に登場した中流意識は消費生活を伴うものであり、家庭や個人を対象としたものであって、そこに共同体に対する意識はない。そしてそれを維持することに一役買った「世間体」は、結果として日本国民に画一化・均質化をもたらしたが、同時にそれは戦前の“生きていくため”という切実さが鈍化したことを意味する。加えて、テレビという巨大なメディア媒体が「世間師」の役割を果たす。このことから、下位層における二つの「世間体」は別物であり、戦前と戦後とを区別して考えなければならないと主張したい。

第2節 「世間学」と歴史学・民俗学－身分・地域・家－

最初に、歴史学と民俗学の知見を参考に西日本と東日本の相違を＜表＞に示す。この表には、東日本と西日本の相違だけではなく、身分差や性差など、本稿の「世間」に関係すると思われるものも取り上げてある¹⁵。

＜表＞西日本と東日本の相違

	項 目	西日本	東日本
A	イエの支配構造	母系的	家父長制的
B	イエの結びつき	年齢階梯制	一極集中制
C	ムラの性格	寄り合い型（地縁的）	同族型（血縁的）
D	人間関係	ヨコの平等関係（家同志）	タテの主従関係（一子相続）
E	ヒトの性格	町人型（開放的）	武士型（閉鎖的）
F	女性の性格	開放的	抑圧的
G	秩序の基盤	ムラ中心	イエ中心

一見すると、西日本はヨコの原理であるのに対して東日本はタテの原理であることが窺え、またイエの支配構造や秩序の基盤を確認する限り、「世間学」で用いられてきた「世間のルール」や世間学の骨子は、東日本を特徴とするものであると捉えることが可能である。そこで、本節では、本稿の副題として掲げた、身分・地域・女性3つのうち、身分・地域を取り上げ、これを歴史学・民俗学の知見を参考にして検討し、併せて家についても取り上げることで「世間学」の妥当性について検証したい。

（1）身分について－タテ社会とヨコ社会－

柳田は、「零落する農村、それ自体は職業集団であって、孤立の力は弱くても相互救済の力はまだ具えていた」と記しているが、（柳田 1976 下：145）ここに農村のヨコの繋がりが窺える。そして柳田は、一種の共済組合の性格を持つ講についても言及する。（柳

田 1976 下：169) これに関連して、文化人類学者の米山俊直は、「仲間」意識を取り上げて様々なヨコ集団について論じ、社会人類学者の中根千枝が唱えたタテ社会を批判する。

米山は、中根の理論には敬意を表しながらも、副題に「単一社会の理論」(単一帰属)とあることに対して異議を唱えた。そして、「頼りになる所属集団はただ一つではない」ということを「仲間」の分析を通して主張するのであるが、その根拠の一つに関東と関西、あるいは東北日本と西南日本の地域差を挙げている¹⁶。すなわち、西南日本には、「座・株仲間・村組織・町組、その他の多様な講などに見られる権力者をあまり認めない。」ヨコの連帯があり、それに対して関東・東北では、「同族団的な血縁の一族の開発がすすめられ、そこでは当然のこととして先住-後住、親方-子方といった上下関係の契機が生まれやすい。」と論じる。そして、「結局、タテ社会的集団編成は、こうした庶民のものではなく、大企業や中央官庁や、講座制のはっきりと残っている大学のような、いわば「エリート」においてよりよく認められるのではないか。」と結論付ける¹⁷のである。この米山の指摘は首肯できるものであって、要するに一部の上位層がこれに該当するのである。

また、米山は、ヨコ社会における上下関係にも言及する¹⁸。もともとは対等・平等の原則によって成立しているはずの仲間集団にもリーダー・フォロワーという関係が生まれてくるのだが、それは長い間の仲間付き合いから見えてくる人徳・人望に拠るものであって、企業のリーダーのような上司や組織から任命されるようなものとは異なり、自然発生的なものから生じるのであると論じる。民俗学者の桜井徳太郎も、同様に、擬制的な親子関係を分析しながらタテ原理とヨコ原理の共生について論じている¹⁹。近年では、社会学者・民俗学者である鳥越皓之が、「村の人づきあい」という観点からタテとヨコについて論じているので取り上げておきたい。

鳥越は、農村社会学者である福武直の講組関係というタテの関係が東北日本には多いという学説を認めた上で、しかしながらタテに基礎を置いた村落でもヨコの関係が不可欠であったとし、村の下部組織としての組やカイト(垣内)を分析する。そしてその役割は、相互扶助に止まらず道普請や水利の整備・掃除などの村全体とする労働に従事することである²⁰と論じる。また講について、豊饒な生産を祈願する講と平穏な生活を祈願する講の2つに大別するのだが、注目したいのが講の本来の目的が“雑談”-ヨコのつながりにあり、このことが村の人付き合いを良好にしていたと論じたことである²¹。さらに鳥越は、室町時代の頃に基本的な形を整えた惣村が関西地域を中心にしてかなり見られたという事実を指摘する。そして惣村には、村のメンバーが寄り合って話し合いながら物事を決めていくといった家としての一票の権利をあったと論じるが、同様の指摘が宮本常一の著書にも見える(宮本 2005: 36-58)・(宮本 2007: 128-130)。因みに鳥越は、その根拠として関西の方が村のまとまりやその境界が明瞭である一方で、境界が曖昧である関東の農村を例に出し、その違いに言及することで関西と関東の違いを主張するのである²²。

これらの見解は、「世間」について論じる場合、少なくとも農村-下位層-においては、タテの原理もしくはヨコの原理のみで論じることにに対しては細心の注意を払うべきであるということを教えてくれる。すなわち、農民の「世間」には、タテの原理だけでは解釈できず、そのことは農民が“生きていくため”にヨコの原理も用いるといった柔軟さを兼ね備えていたことを物語るのである。前出、桜井は、「日本の地域社会の対応は決して頑固ではなく、常に柔軟性を発揮し逸早く変動の波長に合わせていく順応性を示してきた」と論じている²³が、首肯できる見解である。

(2) 地域の違いについて-東と西-

西日本と東日本との差異を強く主張したのは、宮本常一である。その見解については、多くが<表>に示されているので敢えて触れない。また、歴史学者の宮本又次は、風土・食物・服飾・芸能・方言・気質と様々な視点から関西と官との違いについて論じており、

その成果の一部もく表>に記載してあるので取り上げることはしない。本節では、民俗学者の福田アジオの见解を取り上げておきたい。

福田は、集落形態の景観について、「総じて、西の近畿地方村落は村落を構成する各家よりも、村落としての一体性、統一性を強調する社会であり、土地利用もムラとして配置し編成している。それに対して東の関東地方村落は村落そのものよりも、個別の家・屋敷を強調する社会で、土地利用も個別の家が優先して編成されていると言える」²⁴とし、それを検証するために衆と番を取り上げる²⁵。そして、衆は、近畿地方では特定の人数を表す場合に使用されることが多く、原則的に個人を単位とし、少なくとも関東地方には見られないとする。これに対して番は、関東地方における村落運営組織として顕著な存在であり、区長・区長代理あるいは自治会長以下の役職者とは別にムラ自らの制度として存在し、家を単位にして家順に担当する役であるとした。このように、福田も関西と関東の村の違い―ムラと個人―を明らかにする。因みに福田は、「世間のルール」の呪術性にも関係すると思われる年中行事についても言及している²⁶ので、その要旨を紹介したい。

福田は、関西地方と関東地方における年中行事の違いについて、関西地方は村を単位とする年中行事が多く関東地方では家を単位とする年中行事が多いことを明らかにした。特に関東地方の家の年中行事について、「関東地方や中部地方の農村では、名主とか地主の家にこのような年中行事の記録が残ることが多い。それらは子孫が前々からのしきたりを守って年中行事を実行することを期待して、個々の行事の内容や方法あるいは注意すべきことを書き残したものである。」と記す。それに対して関西地方については、近江湖北の下丹生に残る昭和初年記載の「年中行事録」を分析し、村の年中行事の多さを指摘する。そしてそれは、全国的に実施される盆行事にも言えることであり、福田によると、近畿地方の村落においては盆の迎え火や送り火を村として行うことはごく一般的であると述べる。日本人が先祖崇拝を疎かにすることは身分を問わず考え難いことであり²⁷、福田の指摘は、家に重点を置か村に重点を置くかの違いはあるが、いずれにせよ年中行事が頻繁に行われていたことを示している。しかしながら、例えば、戦後、個人や家族を優先して地域行事に参加しない若者や家族が増えてきたという現象は、改めて例を挙げるまでもなく、数多く指摘されてきた事実である。従って年中行事の多さが即座に「世間学」の呪術性に繋がるかは疑問である。

（３）家（イエ）について―家（イエ）と「世間」―

柳田は、「百姓奉公は普通に兄弟が他人となる始まりであった。家には最早分かち与うだけの田畑もなく、本人は農を得意として静かな村の生活を好むという場合に、どこか人手の足らぬ家を見つけて、新たに主従の縁を結ばせるのであったが、隣近所にそういう家は見付からぬほうが当たり前であった。」（柳田 1976 下：79）と記している。要するに、本家と分家との関係が疎遠になり、分家は新百姓となるということである。これを先に確認した「世間」の構造図に則ると、原理的には一番内側にある「ミウチ」が縮小し家が単体で存在するということになってしまうが、これは家を中心とする東日本に言えることであって、村を中心とする西日本では「ナカマウチ」が残ることになる。しかしながら、こういった現象が理論上、共通解となりうるか否かについては一概には言えないし、家中心と言っても村での付き合いは当然、継続される。ただし、「ミウチ」にせよ「ナカマウチ」にせよ、前節で確認したように旧来の人間関係が疎遠になっていくことだけは確かである。

宮本常一も、弘化三年に山口県大島で生まれた自身の祖父について記しながら人間関係の変化に言及する（宮本 2005：208-209）。宮本の祖父が言うには、義理はよく果たし、正月の挨拶についても、祖父の若い頃は「おおとびでございます」と言って家に入ってきたが、宮本が子供の頃には「おおとび」の挨拶はなくなっていたという。そして、祖父が亡くなった時に、古い親類は「じいさんの死んだことだし、親類のつきあいはやめにしよ

う」と何軒かの家から言ってきたことを記す。さらに宮本は、「世間態をやかましくいたり、家格をやかましくいうのは、われわれよりも（注：宮本常一は 1907（明治 40）年生まれ）もう一まわり上にいる、村の支配層の中に見られるようにみえる。」と記したうえで、それは決して自身の郷里のみの現象ではなく、他にも存在したことを会津盆地の片田舎の貧農の家に育った蓮沼門三の自伝から読み取っている。わずかな事例であるが、このことから身内の死去に伴って人付き合いの在り方も変わることを示している。

さて、佐藤は、結婚を例にとり「家意識」について、「法律上の「家意識」は、戦後の新しい民法によって消滅した。だが、結婚は個人と個人のつながりではなく、「家」と「家」とのつながりであるとする「家意識」は消滅しなかった」と主張する（佐藤 2023：108）。そして「家柄」を取り上げて、「家柄というのは、まさにこの「世間」における「身分制」をめぐるルールのことなのだ。」と断じる（佐藤 2023：110）。

そもそも家格や家柄については、＜前近代＞から続く伝統的な家は上位層が多いことが先の宮本常一の記述から推察できるが、歴史的に見てもその割合はごく僅かである。むしろ時代が変わると、新たに資金力を有する者が共同体の名士として君臨することもあり、それは資金力や経済力を背景に共同体を富ませたり、村人の生活を豊かにしたりしたからであって、その恩恵を受けた人々が感謝と敬意を込めて家格や家柄を尊重し、また当事者自身も家格や家柄を意識するのである。時代が進むと教師や医者、軍人など、学歴を有する者もこれに該当する。そして時代の流れによって繁栄する者もおれば没落する者もいるのが世の常であるが、そもそも＜前近代的＞な伝統を重視した場合、没落という現象は考えづらい。佐藤が示した伝統的な「家意識」は、少なくとも平民に対しては、明治から昭和初期にかけては該当し難いと言えるのではなかろうか。

因みに家父長制に関しては、＜表＞で示したように西日本は母系制であり東日本は家父長制を特徴とすることが民俗学の立場から主張されているので、具体的に取り上げることとはしない。しかしながら、次の点は指摘しておきたい。1920（大正 9）年に第一回国勢調査が実施され、それを社会学者の戸田貞三が分析している²⁸。戸田によると、当時の日本の総人口 5,596 万 3 千人の中で、約 574 万 7 千人が家族から離れて生活し、特に東京市では約 63 万人、全市民の 27%が戸籍上の家と離れて生活していると分析した。また、それを年齢層別に分析した結果、東京に暮らす青年層の半数以上が家族から離れて一人で生活していることを明らかにした。更に、これらの家族から離れた人々を除いた通常の世帯の平均人員数を求めた結果、全国的には 4.5 人であるが、東京市は 3.7 人、大阪市は 3.5 人という数字を算出したが、これらの数字は伝統的な家制度が衰退していることを示している。とりわけ、特に人口が多い東京や大阪で核家族化が進行することで伝統的な家制度の衰退は加速したであろう。すなわち、旧来の家父長制や大家族制とは異なる新しい家族が大都市を中心に根付き始めたのである。この新しい家族については、第 3 章で中間層としてのサラリーマンと主婦の役割を取り上げる際に言及することになる。

小括 1－「世間学」と身分・地域－

以上、第 1 章・第 2 章を通して歴史学や民俗学の知見に参考に「世間学」を検証・考察をした結果、明治から昭和初期にかけては身分や地域によって各々の「世間」があり、一概に「世間学」で括することはできない²⁹ということを明らかにした。特に身分制については、「世間学」の一つである義理は平民層には該当せず、それは「生きていくため」に必要な行為であったが、時代の変化に伴って衰退したことも明らかにした。

また、＜前近代＞的な伝統的な共同体が明治以降、今日まで続いているのではないか、

という問いに対しては、当時の日本社会の大多数が平民であったということから民俗学を中心に下位層に関する様々な資料を用いて検証した結果、日清戦争を契機に明治後半から昭和初期にかけて断絶が見られ、そして戦時中を除き、戦後の高度経済成長期に再び断絶が進んだことも、戦前と戦後の「世間体」に関する構造の変化や性格の違いを指摘することで明らかにした。併せて「世間学」で用いられる「世間のルール」や世間学の骨子は上位層に該当し、かつ東日本の「世間」の特徴を示すものであるということも明らかにした。

最後に、繰り返しになるが、戦後の高度経済成長期に日本国民のほとんどがある程度の豊かさを持ち、日本国民の間に中流意識が芽生えるようになる。ここで「世間体」が問われるのだが、それは中流としての生活の維持ないしは更なる向上を意識した結果としてもたらされたもの³⁰であり、戦前の“他人の邪魔にならぬ”ことを意識した共同体における「世間体」とは別のものである。戦後の「世間体」―“他人と同じでありたい”―は、共同体を対象とするものではなく家や個人を対象としたものであって、戦前の「世間体」とは性格が異なるのである。そして、戦後の「世間体」は「世間」の構造が緩やかに変化したことにも影響したのである。以上のことから、「世間」の復活や溶解という議論に関しては、各々の見解が近代日本社会において伝統的な「世間」が継続してきたという前提に立つ限り、現段階ではそのどちらにも与することはできないという立場を取りたい。

註

- 1 身分制に関して、本稿で扱う資料の中には「階級」と記されるものもあるが、江戸時代の身分制が考察の対象となることや「世間学」では身分制として用いられていることから、本稿では、身分制という表記を用いる。
- 2 「全国部落調査」、中央融和事業協会、1935年、の調査報告書に拠る。
- 3 祐文社から刊行。(国立国会図書館デジタルコレクションより)
- 4 佐藤直樹『なぜ日本人は世間と寝たがるのか』、2013年、春秋社。59頁。
- 5 「横山 2004」には次の3例が確認できる。55、207、271頁。
- 6 「柳田 1976 下」93、143 頁など。別著には「他郷を総括して世間とは言つて居た」と記している箇所もある。(『世間話の研究』『定本 柳田國男集』所収、1985年、筑摩書房。)
- 7 尚、阿部の言う「世間」は、同総会、会社、学会などの狭い人間関係を指し、主にこれらを基準に「世間」を論じているが、「世間」は重層的であり、後述するように、身分や地域によって各々の「世間」があるので、阿部の「世間」の解釈は一面的であるという印象を受ける。
- 8 『テレビは見てはいけない―脱・奴隷の生き方』、2009年、PHP新書。26頁。
- 9 この点について補足しておきたい。後述するが、戦前は“人の邪魔にならぬよう”が平民の「世間体」であり、戦後の高度経済成長以後は“人がそうするから自分もそうしたい”という欲望が根底にある「世間体」である。戦後、生活水準が向上し、それを維持もしくは更に向上させたいと考えた時に「世間体」という内面に欲望が浮上してくるのである。近年ではペットブームなどがその事例となろう。
- 10 社会心理学者の菅原健介は、「地域社会のタニン化」という表現を用いて論じている。(『羞恥心はどこに消えた?』、2006年、光文社。161-162頁。)
- 11 松沢裕作『町村合併から生まれた日本近代―明治の経験』、2013年、講談社選書メチエ。188-189頁。
- 12 松沢、前掲書(11)。189頁。
- 13 大牟羅良『ものいわぬ農民』、1958年初出。岩波新書。72-73頁。
- 14 鶴見和子『好奇心と日本人』、1972年。講談社現代新書。173-175頁。

- 15 <表>の作成に関しては、網野善彦『東と西の語る日本の歴史』（1998年、講談社学術文庫）、宮本常一『忘れられた日本人』（2005年、岩波文庫）、宮本又次『関西と関東』（2014年、文芸春秋ライブラリー）、を参考にした。
- 16 米山俊直『日本人の仲間意識』、1976年、講談社現代新書。67頁。
- 17 米山、前掲書（16）。71頁。
- 18 米山、前掲書（16）。74-79頁。
- 19 桜井徳太郎『結衆の原点』、1985年、弘文堂。
- 20 鳥越皓之『村の社会学』、2023、ちくま新書。60-61頁。
- 21 鳥越、前掲書（20）。62-65頁。
- 22 鳥越、前掲書（20）。166頁。
- 23 桜井、前掲書（19）。71頁。
- 24 福田アジオ『番と衆』、1997年、吉川弘文館。99頁。
- 25 福田、前掲書（24）。「「衆」と「番」の特質」（123-130頁）。
- 26 福田、前掲書（24）。「年中行事の東・西」（141-164頁）。
- 27 松原岩五郎は、『最暗黒の東京』（1893年、民友社初刊。後、2015年、講談社学術文庫）で「あるいは縄もて仏壇を掲し、また古屑籠を掃めて神体を安置し、もって祖神、祖仏を奉祀するの崇敬心を壊らず。」という記述があり、細民も先祖を崇拝していたことが判る（26頁）。
- 28 「第二章ーわが国の家族構成第二部一家族構成員数」『（新版）家族構成』、2000年、新泉社）。尚、この点については、松山巖『乱歩と東京』（1994年、ちくま学芸文庫。97-98頁）を参考にした。
- 29 この点に関して、岡檀『生き心地の良い町』（2013年、講談社）は、“生きていくため”の人々の伝統的な知恵が現代にも継承されていることを教えてくれる。フィールドワークの対象となったのは徳島県旧海部町であり、そこに「世間学」の4つのルールを見出すことは難しい。
- 30 この点に関して、戦後におけるアメリカの影響は決して無視できない。アメリカ文化が日本人の日常生活にまで浸透することで戦後の「世間」や「世間体」に影響を与えたと考えている。

【主要参考・引用著書】

- ・阿部謹也（阿部 2003）：『日本社会で生きるということ』、2003年、朝日文庫。
- ・阿部謹也（阿部 2004）：『日本人の歴史意識』、2004年、岩波書店。
- ・阿部謹也（阿部 2006）：『近代化と世間』、2006年、朝日文庫。
- ・井上忠司（井上 2007）：『世間体の構造』2007年、講談社学術文庫。
- ・今枝法之（今枝 2014a）：「「世間学」再考」、『現代化する社会』所収、2014年、晃洋書房。
- ・今枝法之（今枝 2014b）：「現代化する「世間」」、『現代化する社会』所収、2014年、晃洋書房。
- ・佐藤直樹（佐藤 2023）：『なぜ、自粛警察は日本だけなのか』、2023年、現代書林。
- ・宮本常一（宮本 2005）：『忘れられた日本人』、2005年、岩波文庫。
- ・宮本常一（宮本 2007）：『庶民の発見』、2007年、講談社学術文庫。
- ・柳田國男（柳田 1976上）：『明治大正世相史・世相編（上）』、1976年、講談社学術文庫。
- ・柳田國男（柳田 1976下）：『明治大正世相史・世相編（下）』、1976年、講談社学術文庫。
- ・柳田國男（柳田 2017）：『都市と農村』、2017年、岩波文庫。
- ・横山源之助（横山 2004）：『日本の下層社会』、2004年、岩波文庫。